英語科・外国語活動を中心とした提言（若有　保彦　先生）

はじめに

令和元年度は、教科指導員として小学校１校、中学校３校の計４校を訪問、視察する機会をいただいた。私の話は「提言」と言えるほど立派なものではないが、せっかくの機会であるので、訪問を通じて感じたこと、また今後の取組の方向性について個人的に感じていることを英語教育の立場から述べてみたい。

学校訪問全体に関する感想

毎年のことだが、最も印象に残っているのは、訪問したどの学校でも、廊下ですれ違う児童生徒が元気なあいさつを自然にできていることである。根底には先生方による日々の地道で粘り強い指導があることと思う。

最初の時間に行われる学校経営説明では、各学校において特色ある目標が定められ、目標の実現に向けて組織として行動する姿勢を感じた。一般授業参観も、多くの先生方が、児童生徒の関心を惹くような工夫を凝らした授業を展開しており、教室に貼られた掲示資料などからも、学習への意識を少しでも高めようとする先生方の努力が窺えた。

特定授業のうち、特に英語および外国語活動の授業に関する感想

特定授業では、どの授業においても、児童生徒と教師、児童生徒同士のコミュニケーションが普段からとれていると感じた。また題材や活動の導入、活動で使うワークシートからも、授業担当者の様々な工夫や努力が窺えた。

今年訪問させていただいた小学校の授業では、それぞれの活動がスモールステップを踏んで行われており、そのステップのさじ加減がすばらしかった。また児童がターゲットの表現に慣れてきた段階でクラス全体の前で発表させることで、外国語により自信を持たせる配慮を行っていた点も印象に残った。外国語活動にありがちな活動の羅列ではなく、授業が目標に向かってきちんとデザインされており、振り返りも、友達のよいところを見つけてほめることに加え、言語面でのフィードバックを行うなど、授業目標を踏まえたものになっていた点も評価できる。

中学校の英語授業では、３校のいずれの授業も、メインの活動への取組に対する意欲を高めるような状況設定の工夫がなされていた。また３校のうち２校でＡＬＴもしくは日本人のＴ２が入る形でのチームティーチングが行われていたが、ＡＬＴやＴ２との連携がスムーズに行われており、チームティーチングが有効に機能している印象を受けた。また、次期学習指導要領において中学校でも「授業は英語で行うことを基本とする」という文言が導入されたことを意識して、授業を基本的に英語で進めようと努力する姿勢も窺えた。これまでは課

題とされることが多かったチームティーチングでの指導者同士の連携や授業を英語で行うことなどが、秋田市の多くの学校において浸透してきていると言える。

一方、課題としては、小学校・中学校の両方に関して、次期学習指導要領のキーワードの一つとなっている「思考・判断・表現」の力を育成する活動がまだ十分には行われていないことが挙げられる。例えば小学校の外国語活動の授業ではペアで同じ文房具セットを作るために Do you have a stapler? No, I don't.などの英語表現を使ってやりとりする活動が行われていたが、活動の目標はパートナーに同じ文房具セットを作るところで終わっていた。もし完成した文房具セットがどの教科で活用するものかを完成後パートナーに推測させるステップを設けていたら、最初に準備する側も目的を持ってセットを考える必要が生じるので、双方に思考・判断を行う機会を作ることができたと思う。さらに、パートナーを外国から来た同級生に見立てて、「それぞれの教科でどんな文房具を準備すればよいかアドバイスしてみよう」のように具体的な場面を設定すれば、活動がより実践的なものになったであろう。

中学校での例としては、東京オリンピックを意識して、東京の路線図の簡略版を使って道案内をさせる活動が行われていた。具体的な場面を設定した点は評価できるが、その際に、相手の状況についても具体的に設定していれば、相手のニーズに応じた答え方を考える機会が提供できたと思う。例えば、相手に十分な時間がある状況なら、多少時間がかかっても、できるだけ乗り換えの少ないルートを提示する、また相手が老人や子どもなら、路線や駅名を具体的に伝えるより、地図に印をつけながら色や番号で示した方がよい、などを考えさせることができたと思う。

ウォームアップの工夫について

「思考・判断・表現」の力を養うために、ぜひ考えていただきたいことの一つは、ウォームアップの工夫である。近年、多くの学校で、Q&A のシートを用いてペアでやりとりを行うウォームアップの活動や、与えられたテーマについて一定時間話をさせる活動を目にする。こういった活動は即興的なやりとりや発表の訓練にもなるため、継続的に行うことは重要である。ただし、こういった活動だけに慣れてしまうと、話題に対して常に受け身の態度になってしまう可能性がある。実際の会話では、自分から話題をふって話す力、会話を続ける力も求められる。このことを考えると、頻度はそれほど多くなくてよいが、５～１０回に１回程度は、自由に決めさせた話題で発表したやりとりを行うウォームアップを体験することも重要だと思う。なお、この活動は、次期学習指導要領のキーワードの一つである「学習への主体的な態度」の育成にもつながると考えられる。「たまには自分の話したいことをベースに行うウォームアップがあってもよいのではないか」という提言である。

他校のＡＬＴとの連携や活用について

普段の学校生活で指導やアドバイスを受ける立場になることが多い児童や生徒が、アドバイスを与える側になることは、他者の役に立つことであり、自己肯定感を高める機会になる

と考えられる。近年の授業では、日本（秋田）での生活にまだ慣れていないＡＬＴを助ける、おすすめの何かをＡＬＴに紹介するといった目標を設定することで、ＡＬＴとのコミュニケーションに必然性を持たせる活動を目にするようになった。このこと自体は非常によいことと考えるが、問題は身近なＡＬＴが通例自校にいる一人に限られることである。そこで、他校のＡＬＴとの連携を拡充し、より充実したものにできないか、考えていただきたい。他校のＡＬＴと連携することで、生徒とＡＬＴが共に活躍の場を広げる機会になる。他校の生徒とつながることは、ＡＬＴに異動があることを考えても、彼らにも有益な経験になる可能性がある。とは言っても、連携を可能にするネットワークの構築は容易ではないので、当面は、コミュニケーション活動で利用できそうな秋田市のＡＬＴの情報（具体的には、出身や好きなものや嫌いなもの、秋田での生活で困っていること、秋田で体験してみたいことなど）を、当たり障りのない範囲内で、先生間で共有することはできないか、検討していただきたい